

「信仰の盾」

エペソ人への手紙 6 : 13 - 17

June.14.2026

エペソ人への手紙 6 : 13 - 17 (パウロ)

Preface

この聖書箇所から、私たちが取るべき神の武具について学んでおりますが、今朝は、エペソ書 6 : 13 の「信仰の盾」という項目について考えていきたいと思っております。

一般的に、「信仰」と言いますと、信じる側の信じる気持ちや程度、信じる私たち側の能力や行い、または責任のように思えてしまうところがあるように思います。

どれくらい熱心に信じているのか、どういう姿勢で信じているのか、どういう行いをもって信じ、どれほどに山を動かすほどの信心を貫き通し続けることが出来るのかというように、「信仰」と言いますと、信じるこちら側にかかっている問題のように思えてしまうということです。

でもそれが、「信仰」における本筋ではありません。

「信仰」において最も大事なことは、「信じる対象が何なのか、信じる対象が誰なのか、信じているお方がどういうお方なのか」が、最も大切な問題です。修業とは違います。

断食して、滝に打たれて、火の中を通過してみたいな荒行をやったから、私の信心のレベルがアップするようなものが、聖書の説く「信仰」ではありません。

つまり、「信仰」をこちら側の責任、信じる私たち側の問題のように思わせ、信じるという行為自体に重きを置かせ、責任を感じさせながら潰れてしまうように焚きつけて来るのが、悪魔の放つ火矢だということです。

そして、その火矢から守ってくれるのが、「信仰の盾」、即ち、「私は一体どなたを信じているのか、私が信じているお方とはどういうお方なのか、そのお方が何をして下さったのか、何をして下さっているのか」という、私が信じているお方そのご存在そのものが力であり、根拠であり、価値であるということです。

聖書の中に出て来る「信仰」という言葉を「神」に置き換えますと、その言わんとしていることがより明確になる聖書箇所が、沢山あるように思います。

例えば、「義人は信仰によって生きる。ですから、信仰によって生きる人々こそアブラハムの子である」(ローマ 1:17、ガラテヤ 3:7) という御言葉の「信仰」という部分を「神」に置き換えて、「義人は神によって生きる。神によって生きる人々こそアブラハムの子孫である」と読み直しますと、その意味がより明確になるように思います。

つまり、「信仰」とは私たち側の力ではなく、「神」というお方存在そのものであり、父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の唯一まことの三位一体の神様がおられるから、初めて成り立つものだということです。

Part One

ある時イエス様の十二弟子たちが、イエス様から汚れた霊どもを制する権威を授けられ、悪霊どもを追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいを癒した時がありました。

ところが、そのような権威ある働きをした後、しばらく経ってまた、「息子に憑いた悪霊を追い出して下さい」という懇願を受けますが、弟子たちはその願いに応えることが出来ませんでした。

すると、そんな弟子たちに、イエス様がお語りになりました。

「あなたがたが悪霊を追い出せなかったのは、あなたがたの信仰が薄いからです。」(マタイ 17:20)

つまり、最初の働きの時には、ただ神を見上げ、ただ神によって、ただ神に信頼して、ただ神がご自分の名にかけてなさることを目の当たりにし、その事実を受け止めたただけでしたが、いつの間にか時間の経過とともに、「あんな不思議なこと僕たち出来たんだよね?! 僕たちって凄いんじゃない? イエス様の名前を僕たちが口にただけでも、悪霊は出て行くし、ひれ伏しちゃうんだから! イエス様の弟子である僕たちって凄いよね! 僕たちの信仰って凄いんじゃない!」と、神ではなく、自分たちに根拠を置く信仰へとすり替わって行ったようです。

自分たちの経験や感覚、自分たちの出来不出来を頼りにした信仰。

いつの間にか、神を薄めてしまっている。

「私がどう信じるのか」という、私の側を中心にしたただの宗教的信心にしまった、なってしまったということです。

ちょっと話が逸れるかもしれませんが、例えば、太平洋を船で渡るとなった時、霞ヶ浦を遊覧する小さな遊覧船で渡る、または、もっと小さな手漕ぎボートみたいなもので渡るとなったら、どれだけ不安なことか分かりません。

でも、大きな豪華客船のような船で太平洋を横断するとなれば安心出来ます。

どんなに自分のことを信じ、命を掛けたとて、小さな手漕ぎボートや遊覧船で太平洋を渡るのは、不安で仕方ありません。

私という人がどんな人なのかは関係ありません。

私が泳げなくても、水が苦手でも、大きなどっしりとした安定した船ならば、安心出来ます。

どんな船にどの船に乗っているのかが、大きな太平洋を平安と安心のうちに横断することにおいて、最も大事な要素です。

私が高校2年生の頃、東京都内の高校生400名が、大きな豪華客船に乗って中国に行き、中国の高校生たちと交流するという16泊17日の東京都主催

の「洋上セミナー」というプログラムに参加したことがあるのですが、高校生一人当たりにかかる旅費が33年前当時で50万円、400名分ですので、2億円という旅費のすべてを東京都が支援してくれるという今では中々考えられないような太っ腹な高校生特別プログラムでした。

で、その中で、中国の高校生との交流も当然素晴らしかったのですが、正直、最も印象に残ったのが、大型客船の中での生活でした。

大きな大きな海の中を、大きな大きな船で進み行く、その安定感とどっしり観に加えて、毎日おいしいものを食べ、毎日楽しいプログラムに興じるという、何か私自身が特別になったと言いましょいか、特別な存在になったかのような錯覚を覚える程でした。

社会的に何も持たない、しがない一高校生を勘違いさせてしまう程に、その大きな客船は、大海原を旅行するのに絶大な安心と喜びを与えてくれました。

要するに何を言いたいのかと言いますと、「信仰」とは、これと同じように、私という人がどういう人なのか、私がどれくらいの強度と熱心をもって信じるのかにかかっているのではなく、何を、誰を、どなたを信じているのか、どなたの中にいるのかが、信仰の核、本質だということです。

聖書の語る「信仰」とは、そのすべてが、「あなたは誰を、どなたを信じているのか？」という信じる対象に焦点を当てています。

私たちに、信じる強度を神様は問うたことは一度もなく、いつも、「あなたは、誰を、何を信じ、何の中にあなたを置いているのですか」と問います。

神様は終始一貫、初志貫徹、そのことをずーっと私たちに問いかけておられます。

イエス様が弟子のペテロに、「下がれ、サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」(マタイ16:23)と叱責されたことがありますが、「わたしに帰りなさい。わたしにとどまりなさい。わたしに従いなさい。わたしに倣いなさい。わたしのことを思いなさい」と、一貫して神様は私たちに語り掛けておられます。

信仰において、何が重要なのかと言いますと、「神を信じている」、「私が信じておられるお方が、唯一まことの神であられる」ということです。

にもかかわらず、サタン悪魔どもは、私が信じているお方に、その理由と根拠と価値を置くという信仰の本質から私たちを離し、信じている側の私たちへと目を向けさせ、私たちを理由とさせ、私たちを根拠とさせ、私たちに価値を見出させようとそそのかし、けしかけてきます。

「神を信じているというのに、そんな程度でしかないのか」という情けなさ、非力さ、みすぼらしさ、不敬虔さ、らしくない姿、神の子、キリスト者に相応しくないんじゃないかという火矢を放って、焚きつけ、神ではなく自分自身に根拠を置いて落胆するよう誘い、燃やし尽くしてしまおうとします。

信仰において最も大事なことは、私がどれだけ信じているのかという私たち側の姿勢や能力よりも、誰を、どなたを信じているのかという信じている対象なるお方です。

信じるという行為自体が力を持つのではなく、「信仰」とはいつでも、信じる対象なるお方が力であられ、信じる対象であられる父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の三位一体なる神がすべての理由であり、価値であるということです。

Part Two

私たちキリスト者は、イエス・キリストを信じる前は、サタン悪魔の攻撃対象ではありませんでした。

ただ管理していればいいだけの管理対象です。

ところが、神であられ、すべての創造者であられ、神の子であられるイエス・キリストを信じ、神の子とされ、神の国に入ることがその栄冠として約束された天の御国に国籍がある天国人となったその時から、最前線の攻撃対象となりました。

どう攻撃し、どういう結果を悪霊どもは私たちから引き出したいのか？

「神の子とされた」というアイデンティティーの否定と剥奪、自己嫌悪と自己否定による自らその栄光の座から降りさせること、つまり、霊的挫折を与えることです。

「私がもし、こんなわらの家を作らなければ、放たれた火矢によって燃やし尽くされるようなことはなかっただろうに… 木の家の方がマシだったかもしれない。 いや、レンガで家を建てるべきだったんだ」と、信仰の根拠を神ではなく、私に置かせようとします。

そして最終的に、神を信じているということを馬鹿らしく思わせ、信じている神を否定させ、神を信じることに価値を見出させない、神ではなく他のものを、または巡り巡って自分という人を信じさせるという高慢へと至らしめようとします。

確かにサタンは、私たちに火矢を放つ攻撃を仕掛けてきます。

例えば、いざ聖書を開いて聖書を読もうとすると、なんでこうも他のことが思い出されるのか、悩ましく思ったことはないでしょうか。

「ガスは止めたかな？ 洗濯物干さなくちゃ！ あ、トイレ行こう。 あ、ライン来たかな？ この本全然読んでないけど、なんか読んでみようかな」と、好きなドラマを見る時には全く全然思い浮かばないようなことが、頭の中を巡り始めます。

サタンは、神が望んでおられる霊的なことを私たちがしようとすると、全力を尽くして妨害します。

小さな一本の火矢を放って、燃える広がるようにけしかけてきます。

私たちの信仰が足りないのではなく、悪魔が、火矢を放ってくる一つの例だ

と思います。

そして、サタンはいつでも、私たちに「疑い」を持たせようとします。

神の言葉である聖書を疑わせます。

ちゃんと信仰生活を送っているある時突然、「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」と告白していたのに、「じゃあ、なんで、そんな全能な神が、僕を試験に不合格にさせ、浪人生活を送るようにしたのだろうか？ あんなに熱心に『合格させてください』と祈ったのに、なぜ落ちたのだろうか？ 果たしてイエス様を信じることで、どんな得があるのだろうか？ 何の得もないじゃないか！」と、疑いの火矢を受けることがあります。

そんな時どうされますか？

また、ある日突然、子どもから、「ねえ、お母さん、人生って何？」と不意の質問を受けた時、何と答えますか？

「そんなことよりも、あなた、宿題やったの？」と応答するしかありません。

でも、この方法こそが、悪魔に火矢を放たれた時に、最も適切な対処方法なんだと思います。

悪魔に火矢を放たれたとしても、何食わぬ顔して、しれっと、時には忍耐して、その日読もうと決めていた聖書1章でも、2章でも読むんです。

祈ろうとして祈りの態勢に入ったんだけど、いざ祈ろうとすると何も思い浮かばない時には、これまたしれっと、主の祈りでも、使徒信条でもいいので口にして、「アーメン」と言って祈りを終えるのです。

「霊的暗礁に乗り上げたな」と感じたら、知っている覚えている賛美を何でもいいので、口ずさむのです。

放たれた火矢に、自ら進んで可燃性のものをさらに投げ入れて、もっと燃え立たせる代わりにです。

私たちが神を疑うよう誘う火矢を放たれたと思ったら、その場から離れて、無理に消そうとせず、逃げればいいだけのことです。

どこに？

神の下へと逃げるのです。

なぜか？

「あなたがたは、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦労はその日その日に十分あります。まず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、あとのことは自然とついてきます」(マタイ6：32－34)と、イエス様が仰ったからですね。

Part Three

また、違った種類の火矢があるように思います。

本能的なと言いましょ、生理的な衝動が燃え上がるような火矢を放たれることがあります。

性的誘惑かもしれません。

見栄を張りたい、人に自分を良く見せたいという自己顕示欲。

好きな物によって生活を満たしたい、贅沢を極めたいという物欲。

血気、怒りを爆発させたいという短気。

それまで、それでも出来る限りを尽くして柔和と謙遜と忍耐と寛容と親切に努めて来たけれども、それらすべてを一瞬にして吹き飛ばしてしまうかのような本能的、生理的衝動に駆られるような火矢を放たれることがあります。

先週学びました、「地の上でだれにもまさって柔和であった」と評されたモーセでさえも、怒りを爆発させたことがありました。

ま～た、「水がない、喉が渇く」と不平不満を口にした民たちを前にして、「岩に命じなさい」という神の言葉を聞かずに無視して、民に対する、また神に対する怒りを爆発させて、持っている杖で岩を思いっきり2回ぶつ叩いたことがありました

そして結果、その時の怒りをあらわにしたことを理由にモーセは、「あなたは約束の地カナンへと入ることが出来ない」と神様から告げられてしまいます。

放たれた火矢にやられたわけです。

ところが、それでもモーセは変わらず、しれっと、何食わぬ顔して、神に根拠を置き、神を理由とし、神により頼み、神を見上げながら生き続けました。

「神様から、私という存在を否定されたのではない。もちろん、悔い改めはする。でもそれ以上に、カナンの地というこの地上における物質的な約束の地が最終目的地なのではなく、地上では旅人であり、寄留者であることを告白しながら、もっと良い地、もっと良い天の故郷、神が私たちのためにご用意下さった天の都を民たちに示そうではないか」と、放たれた火矢によって燃やし尽くされてしまうことに身を委ねることはしませんでした。

放たれた火矢に軽い火傷は負ったものの、「私は本当に神の民なのだろうか、あんな怒りを発してしまっ。なんて私はダメな人間なんだ。神の愛を受けるに相応しくないんだ。罪を犯さないと騒ぎ立てたところで、結局罪を犯すなんて、神の前に祈る資格もない」なんていう放たれた火矢に燃やし尽くされてしまうような自己否定、自己嫌悪、神の子という王座から自ら降りてこようとは思わず、また再び神に根拠を置く「信仰の盾」を取りました。

そして、しれっと、ある意味厚かましくも、神に喜ばれる、神様が微笑むような霊的図々しさを発揮して、神の民としての栄光の座に留まり続けながら、神に祈り続け、神とともに歩んで行きました。

そうして、最終的にモーセを評する言葉として聖書に残されたのが、

申命記 34 : 7 (パワポ)

モーセが死んだときは百二十歳であったが、彼の目はかすまず、気力も衰えていなかった

という言葉です。

つまり、モーセという方は、イエス・キリストを信じる者として、挫折して、絶望して、イエスを信じるその地位と身分を放棄して「もうどうにでもなれ！」とはせずに、神を見上げ、神にその身をお委ねし続けたということです。

Part Four

また、違ったサタンの火矢として挙げられるのが、「迫害」という原色的な攻撃だと思います。

イエス・キリストを信じているという人々を、恐れさせます。

「イエス様を信じたら、家庭に困難が訪れた」、「イエス様を信じたら、体調が悪くなった」、「イエス様信じたら、村八分にされた」、「イエス様信じたら、不利益を被るようになった」、「イエス様を信じてがいるために、昇進できなかった」、「イエス様を信じているという理由で、煙たがられ、のけ者にされた」、もっと行きますと、「イエス様を信じているという理由で、命が危ぶまれるようになった」など、霊的な面においても恐がらせ、日常生活においても恐怖を覚えさせるような攻撃をします。

第一ペテロ 5：8 を見ますと、

ペテロの手紙第一 5：8－9（パウロ）

私たちの敵である悪魔が吼えたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。

虎視眈々と機会を狙っています。

迫害という攻撃の前に、さらそうとします。

そして、それに対抗する唯一の方法は、信仰に立つことです。

つまり、私という人ではなく、神なるお方を、主イエス様を根拠とし続けることです。

「強く信じ続けて、私の中に悪なる考えや不敬虔な考えが思い浮かばないようにする」というものではありません。

ある意味、サタンが火矢を放ってくることは止められないことです。

避けられません。

サタンが火矢を放てないようにする戦いは私たちの戦いではなく、神様がなさること、神様の戦いです。

神様はわざと、意図して、サタンが火矢を放つように置いておかれることさえもあります。

代表的な例として挙げられるのが、ヨブではないでしょうか。

サタンは、思う存分ヨブに火矢を放ちまくり、ヨブをぐしゃにぐしゃにやり込めました。

たった一晩で、妻以外の全家族を殺害し、所有していた膨大な財産のすべてを奪い去って行きました。

頭先从足裏に至るまで良いところが一つもないくらいに悪性の腫物が体中に満ち、さらには、最も信頼していた親友だと思っていたような人たちからも苦しめられました。

霊的迫害、肉体的迫害、社会的迫害のすべての火矢がヨブに放たれ、ヨブを打ちました。

信仰があるから攻撃を受けない、火矢を放たれないなんてことは、聖書のどこにも書かれておりません。

逆に、信仰があるから攻撃があり、信仰があるから容赦ない火矢を放たれることが書かれております。

なぜか？

有益だからです。 私たちにとって、それが有益だからです。

私たちは、攻撃を受けないから平安なのではなく、私たちがサタンの攻撃に最終的に勝利するよう、神様は求めておられます。

奴らの攻撃ごときでは決して揺るぐことがないところまで、私たちを造り変えなさろうと、神様はサタンの攻撃を放っておかれます。

私たちに神様は、サタンの攻撃にも揺るぐことのないところまで求めておられるということです。

大抵の私たちの失敗、私たちの試行錯誤は容認しておられるということです。だから聖書はこうに言います。

ヤコブの手紙 1 : 2 (パウロ)

なぜか？

ヤコブの手紙 1 : 3 - 4 (パウロ)

試練は、私たちを破滅させることは出来ません。

私たちを躓かせることは出来ます。

でも、永遠の滅びへと陥れることは出来ません。

そんな霊的戦いにおいて本領を発揮するところが、正に、サタンの火矢を受け、挫折した場面です。

火矢を受けると、何はどうあれ、とりあえず挫折します。

恥ずかしくなり、羞恥を覚え、怒りが湧き、苦しく、信仰者であることを忘れてしまいます。

そこが、正に戦場の真ただ中です。

信仰の戦いです。

悪魔の火矢を受けた時、ようやく初めて、私の信仰が何を根拠にしているのが分析され、表に出てきます。

自分を根拠にしていたのか、それとも、神を根拠にしていたのかが明らかになります。

目標としているところに自分の力で行こうとしているのか、神の力によって行こうとしているのかが、明らかになります。

信仰とは、私の自慢、私の信仰歴、私の学び、私の経歴、私の誠実や私の義や私の忍耐力で説明するのものではなく、信じているお方がどなたなのか、どんなお方なのかが、すべてです。

信じるという行為自体に力があるのではなく、信じる対象が力であられ、内容であられ、主賓であられます。

Part Five

私たちは神を信じていますが、神の何を信じているのでしょうか？

神様が私たちに対して持つておられる愛、その愛を全うされる力、約束しておられることを変わりなく成し遂げられる誠実さ、恵みといつくしみをもって滅びから永遠のいのちへと救い出して下さった事実、私たちを赦すことに最大の喜びを覚え、私が失敗した時も、私が挫折した時も、私が罪を犯した時もそのすべての過程を余すところなく隅々までご存じで、またそこから、いくらでも救い出し、贖い出して下さるということを、信じています。

神様が私たちに対する御心、ご計画、私たちへの熱心に価値があり、内容があり、すべてのことがあるのであって、私たちが信じるという行為自体にあるものではありません。

これを混同してしまうと、無駄な比較と、比較から来る優越感や劣等感、または争いや葛藤が生じます。

悪魔の火矢を受ける人は信仰に劣っていて、受けない人は信仰が優れている、または、試練を受けるということ自体が、もう既に信仰において失敗であり、試練を受けないことが信仰において成功であるというようなご利益、ゲン担ぎ、迷信、悪魔が作り出した偽の宗教観と何ら変わらないものにしてしまい兼ねないでしょう。

「神の喜ばれるいけにえは、私たちの砕かれた霊、打たれ、砕かれた心。それを決して蔑まれることのない神。私は私の足で立っているのではなく、主の懷に抱かれている。私を倒したいならば、先ず主を倒してから倒しに来い！私を取りたいならば、主なる神様を倒してから来い！」という告白が、事実が、私たちの信仰の盾です。

Conclusion

この後、応答の賛美として歌う讃美歌 267 番は、聖書を土台にしない信仰から聖書の御言葉を土台にする信仰へと改革を起こした、所謂宗教改革をしたマルチン・ルターが作った賛美です。

その歌詞の中に、「悪魔世に満ちて、よし脅すとも、神の真理こそ我が内にあれ」とありますが、一日中ルターの働きを妨害し、夜の寝床にまでついて来た悪魔に、「もう寝るから。帰れ！」と言ったり、文章を書いているのにやたらと妨害してくる悪霊に向かってインク瓶を投げつけたこともあったほどに、ルターは執拗な悪魔の妨害を受けていました。

でもそれは、ルターが悪かったからではありません。

主なる神様に、主なるイエス様に、その信仰の根拠を置き続けることにおいて揺らぐことがなかったからです。

キリストを信じる者には、サタンの火矢が放たれますが、しれっと、何食わぬ顔して、遜る心、砕かれた心を持って、いつでも、どこでも、信仰の盾を私たちは取ることが出来ます。

神へと帰る、神へととどまり続ける、神のもとへ逃げる事が出来ます。

私たちの神、主イエス様にくつつき続けていきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：ヤコブの手紙 1：2